

極小未熟児の9歳児までの知的発達の推移  
～ 知能検査結果について ～

分担研究者 前川喜平 1) 研究協力者 犬飼和久 2) 神谷育司 3) 共同研究者 齊藤さつき 4)  
河合恵美子4)

1) 東京滋恵会医科大学 2) 聖隷浜松病院小児科 3) 名城大学教職課程部 4) 聖隷浜松病院臨床心理学  
1) Jikei University, Dept. of Pediatrics 2) Seirei Hamamatsu Hospital Pediatrics  
3) Meijo University, Dept. of Teacher Education  
4) Seirei Hamamatsu Hospital, Clinical Psychology Section

【要約】極小未熟児の発達をチェックするためのプロトコールとして心理検査による評価を実施した。聖隷浜松病院では、3歳代の幼児期は田研・田中ビネー式知能検査を実施し就学年齢に達する段階ではWISC-Rを実施している。「ハイリスク児の総合的ケアシステムに関する研究」で取り組んだ、極小未熟児就学前発達の研究による聖隷浜松病院での昭和61・62・63年の対象児が1998年3月の時点で、この3年間の被験児が満9歳に達したので、実施した知能検査の推移の結果である。この3年間の入院児数は164例で生存退院数は136例である。136例について満9歳までの追跡率は年度により差があるが3歳では98.5%、6歳では97.0%、9歳では77.8%である。3歳の時点での知能指数の平均は102.0(SD=15.9)、6歳代ではFIQ=91.9(SD=15.9) 9歳代ではFIQ=97.2(SD=13.4) という結果であった。

【見出し語】 極小未熟児 追跡研究 9歳児 田研・田中ビネー知能検査 WISC-R知能診断検査

【研究の意図】 極小未熟児の発達をチェックするプロトコールとして前川研究班により、2歳、3歳、就学前(6歳)と就学後が作成されている。就学後の段階は9歳の時点を取り、3歳・6歳・9歳と同一対象児を追跡し知的発達の様相を検討することを意図した。

【対象児】 聖隷浜松病院未熟児新生児センターを昭和61・62・63年に生存退院した出生児である。この3年間の対象児は136例である。昭和62年生まれに5歳での心臓手術後の死亡例があり、6歳以後の追跡例は135例である。136例の出生体重の平均は1145.3g(SD=253.5) で在胎週数の平均は30w+2d(SD=3.2) である。

【方法】 知的発達の測定は、3歳の段階では田研・田中ビネー知能検査を実施し、そのうち10例(7.3%)は津守・稲毛式の乳幼児精神発達検査を実施した。6歳と9歳の時点ではWISC-Rによる検査を実施した。

は47例中の38例(82.6%)で、63年の症例では48例のうち30例(62.5%)であった。63年で追跡率が低下しているが1998年の3月の春休みに来所予定の症例もあり、追跡可能な症例は増えるものと予測される。全例136名の追跡は3歳の時点で134例の(98.5%) 6歳の時点では131例の(97.0%)で9歳では105例の(77.8%)である。3歳以後の知能検査結果 3歳・6歳・9歳の各年齢段階の検査結果は表に示されるごとき結果である。発達チェック簡易プロトコールのAxis IIにより精神発達はWISC-R85以上を正常とする。3歳の時点での発達検査により発達指数が85未満の症例は20例で14.7%に当たる。20例の平均は63.8(SD=14.2) でこのうち5例が6歳さいしは9歳の時点でWISC-Rで85以上に達している。3歳の時点での発達指数は85以上であったが、6歳の段階でFIQが84以下の症例が19例である。3歳 6歳(WISC-R) 9歳(WISC-R)

年	対象数	出生	在胎	田研	FIQ	VIQ	PIQ	FIQ	VIQ	PIQ
	M:F	体重 g	週数 w+d							
61	(18:23)	(Mean) 1148.0	30+1	105	95	95	96	97	97	98
		(S D) 249.8	2.9	13	15	14	17	13	12	16
62	(27:20)	1139.0	29+6	101	90	89	92	95	97	93
		234.0	3.6	14	17	15	17	14	14	15
63	(24:24)	1147.0	29+6	100	90	92	89	99	99	98
		279.0	3.1	16	14	15	16	11	14	11
	(69:67)	1145.3	30+0	102	92	98	92	97	98	96
	136	253.5	3.2	15	15	15	17	13	13	15

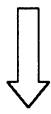
【結果】 追跡の経過 3歳の時点では、昭和61年の41例の対象児の追跡率は(97.5%)、62年対象児は全例が、63年では(97.9%)が検査を実施できた。6歳では61年の追跡率は(97.5%)が、62年の症例では(97.8%)が63年では(95.8%)が検査を受診している。9歳の段階では61年の対象児は41例中の37例(90.25%)が62年で

頻度は135例中の19例で14.1%である。19例のうち9歳の時点で15例にWISC-Rを実施し、4例は9歳のFIQの値が84以下であった。WISC-Rによる知的な発達は年齢に対応し変化するものであるが、全般的にそう大きく変動するものでなく3歳から6歳で実施した検査は9歳の時点での知的な発達に予測可能である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】極小未熟児の発達をチェックするためのプロトコールとして心理検査による評価を実施した。聖隷浜松病院では、3歳代の幼児期は田研・田中ビネー式知能検査を実施し就学年齢に達する段階ではWISC-Rを実施している。「ハイリスク児の総合的ケアシステムに関する研究」で取り組んだ、極小未熟児就学前発達の研究による聖隷浜松病院での昭和61・62・63年の対象児が1998年3月の時点で、この3年間の被験児が満9歳に達したので、実施した知能検査の推移の結果である。この3年間の入院児数は164例で生存退院数は136例である。136例について満9歳までの追跡率は年度により差があるが3歳では98.5%、6歳では97.0%、9歳では77.8%である。3歳の時点での知能指数の平均は102.0(SD=15.9)、6歳代ではFIQ=91.9(SD=15.9) 9歳代ではFIQ=97.2(SD=13.4) という結果であった。